

石橋を叩く前に渡れ

上 廣 哲 治

熱帯夜がつづいた夏の暑さも一段落して、夜が過ぎしやうい頃となりました。「灯火親しむべし」というように、読書にふさわしい季節の到来です。

この季節を迎えると、昔教わった「読書百遍」という言葉を思い出します。これは、中国の三国時代（二二〇～二八〇年）、魏の国の董遇という学者が弟子に伝えたと言われる勉強法です。

董遇は弟子に特別何かを教えようとはせず、まず自分で書物を熟読すること、意味がわかるまで何遍も何遍も読むことの大切さを言い聞かせます。「読書百遍」、すなわち百回も繰り返して読めば、自然にその意味がわかり、内容が理解できるようになるというのです。ところが弟子は納得せず、自分には百回も本を読む暇などないと訴えます。これを聞いた董遇は、「そうはいっても、『三余』というものがあ

るだろう」と答え、「三余」の意味するところを次のように説きました。

「冬は年の余りである。夜は日の余りである。そして降りつづく雨は時の余りである」

農耕社会においては、冬は農閑期で、家に閉じこもって春を待つ時期ですし、夜は農作業から解放される時間です。また、「晴耕雨読」というように、雨の日は天から授かった休息の日ともいえそうです。そのような三つの余暇（三余）を読書にあてればよいというのが、董遇の言い分なのです。

現代社会に生きる者には、董遇のエピソードはたいへんのどかなものと思われまます。いまでは何度も本を読み返す時間どころか、「三余」を得ることさえ困難だからです。「農閑期」だからといってのんびりしてられる農家は少ないし、日没とともに帰宅できるサラリーマンもほとんどいません。雨の日に仕事を休んで本を読んでいる人など皆無に近いでしょう。では、私たちにとって「余り」の時間は、それほどまでに失われているのでしょうか。

「毎日五分間だけ簡単な運動をすれば、たった一か月でスマートになれます」——町の書店を覗けば、そんな謳い文句のダイエット本がたくさん並んでいます。なかには効果観面のものもあり、本に教えられるまま運動をつづけ、みごとダイエットに成功した人が、私の知人にもいます。しかし、それはまれなケースかもしれません。誰もが、「わずか五分なら、自分にも簡単にできそうだ」と思いながら、たいていは数日のうちに、その五分間をつくることさえ怠けてしまうからです。

そうなると、「余り」の時間をつくれないうのは、忙しさの問題というより、各自の心構えの問題になってきます。董遇の真意もそこにあつて、「読書の時間が得られるかどうかは、本人の心構え次第」と論じたのでしょう。何かをしようと決意し、実行に移し、持続させるための強い心がなければ、現状は何も変えられない。流行の言葉を借りれば、「ボーッと生きてんじゃねーよ!」というわけです。心構えの強さはもちろん、倫理の実践にも求められます。

たとえば、先師はしばしば、「為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の 為さぬなりけり」

という有名な言葉を用いて、実践に向かう主体的な心構えの大切さを訴えておられました。この言葉は、江戸時代中期の米沢藩主、上杉鷹山（治憲）が家臣に与えた教訓として知られています。鷹山は崩壊寸前の藩財政を立て直した名君にふさわしく、「何ごとも強い意志をもって実践すれば、必ず成しとげることができる。できないのは、何も実践しないからだ」というのです。

私たちは大小の壁に突き当たるたびに、「自分には何もできないのではないか」という無力感に襲われることがあります。そんなとき、鷹山の力強い言葉に触れると、自らを省みることの必要性を痛感させられます。自分は本当に何かをしようという決意を持っていたのか。それを実践に移そうとしたのか。持続的に実践できていたのか。何もできないのは、何もしなかったからではないかと。

高度成長期までの日本人には、「やってできないことはない」という、がむしやらの姿勢が見られました。昭和三十九（一九六四）年の東京オリンピックで金メダルを獲得した女子バレーボール・チームなどは、その典型といえるかもしれません。当時、監督を務めた大松博文さんによる凄まじい特訓も、大きな話題になりました。ベストセラーになった大松さんの著書のタイトルは『おれについてこい！』、そして、『なせば成る！』でした。

もちろん、この時代の「がむしやらさ」が、経済の発展と豊かさを求めるあまり、「公害」のような弊害を生みだしたことは大いに反省しなければなりません。労働者が家庭を顧みず、ひたすら会社のために働きつづけてきたことも、さまざまな問題を引き起こしました。わが会も例外ではなく、一種の「がむしやらさ」が実践に歪みをもたらし、そのことへの反省が会の「改革」の契機にもなったのです。

しかし、現在の私たちはあまりにおとなしく、「利口」になりすぎてはいないでしょうか。何かを始

める前に、「それは無理」「できないことはできない」とあきらめてしまう傾向が見られるのです。やれるかどうかを悩む前に、まず実践に一步踏み出すこと、「為せば成る」の精神を無理のないかたちで取り戻すことが、「改革」を推進するためにも求められているように思うのです。

日本初の南極観測隊の越冬隊長を務めた西堀栄三郎さんは、『石橋を叩けば渡れない』という著書のなかで、「何か新しいことをする」ときの心構えについて記しています。

新しいことを始めるには、リスク（危険）が伴います。大きな失敗をするというリスクもあれば、現状より状況が悪くなってしまいうリスクもある。だから、やるかやらないかを決める前に十分調査すべきだという考え方もあるのです。しかし、西堀さんは「そんな考え方はどうして新しいことはできない」といい、次のように記します。「やるかやらないかを決心する前に、こまごまと調査すればするほど、やめておいた方がいいんじゃないかということになる。石橋を叩いて渡る」とか、渡らん」とかいうけれども、石橋を完全に叩いてから、渡るか渡らんか決心しようなんて思っていたら、おそらく永久に石橋は渡らんことになるだろうと思います」。

西堀さんによれば、新しいことにはリスクがつきものであり、「みすみす失敗するかに見えるような場合でも、どうしてもそれをやることに決心しなければならぬ場合もある」のです。

私たちが進めている「改革」も、大小のリスクを抱えているかもしれませんが。しかし、それを恐れて石橋を叩いているだけでは、永久に橋を渡ることはできません。誰かが渡るのを待っているのではなく、皆さん一人ひとりが、「為せば成る」の心構えをもって主体的に行動していくこと。そこからこそ、新しい道は切り開かれていくのです。